第63話

朝をひらく

「ただそれだけのこと」

戦火で寺焼失の僧

永田 円了
真国寺住職

小さな〝自分〟を手放すことによって、語り継がれる物語がある。

終戦まもないころ、寺の坂をかむように上がってくる書生がいた。容貌は研いだように細く、表情は苦渋に満ち、世の辛苦を一身に背負っているかのように足取りは重かった。

日本中が空襲で焼け野原となっていた1945（昭和20）年、なけなしのお金で汽車の切符を買い、東京から富山に向かった書生は、人生の難問に逢着していた。16歳で父を亡くし、一家の長男として母と弟妹を養っていかねばならない。「こんな時に学問なんか続けていられるか。富山で百姓をしよう」と覚悟を決めていた。

寺の坂を上りきって書生は凝然と立ちすくむ。寺がない！焼夷弾の火の手は堂宇を灰と化していたのである。和尚さんは大丈夫か。思わず、「おーい！」と叫んだ。あたりを見回すと、杉の木立のそばに、何やら掘っ立て小屋のようなものがある。

人の気配を感じて、中にいた寺僧が出てきた。わらのムシロをひょいと持ち上げ、ニコニコして近づいてくる寺僧の姿に、書生の心は驚いた。思わず目から涙があふれる。寺をすべて失い、雨露をしのぐだけの小屋で、これからどうやって家族を養っていくのか。考えるだけで気が重くなる、はずなのに、この明るさ、ひょうきんさ、これは一体何だろうか。

書生は一通りの事情を寺僧に話し、学業をやめ農業で生計を立てたいことを告げる。できれば自分が入り込める農家を紹介してほしいと、お布施を渡そうとした。寺僧は左手で布施袋を受け取りながら、右手で袖の中を無造作にまさぐり、手でつかんだお札を布施袋の上にのせて、書生に押し返した。

「こんな時期だが、学問だけは捨てちゃだめだ。いったん志したことはやり通しなさい。これは生活と学資の足しにしてください」「寺も灰になった。まあ何もかも失ったが、それがどうした、ただそれだけのこと」。柔和な表情ながらコトバは謹直な響きをもって書生の心に飛び込んだ。

それから3年、無事東大を卒業した書生は、水力発電ダム建設に一生をささげる。あの時、あの出来事がなければ、と事あるごとに口にした。人間の歴史というものは、じつに精妙な伏線でできあがっているものである。この寺僧のとった惻隠の情は、書生にとって永遠なる人格生命となって後世に語り継がれるものとなった。

追記、その出来事のあと、寺僧は家族の台所を仕切る女房どのから、こっぴどくお灸をすえられることにあいなり候。